短編企画「しずくとつむぐ」応募作品

藤原平城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編企画「しずくとつむぐ」応募作品

【コード】

N9744T

【作者名】

藤原平城

【あらすじ】

短編企画「しずくとつむぐ」への応募作品です。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/46398/blogkey/194314/>

「FujiwaraHeijou.com」にも重複投稿」

《授業が終わったらずくに図書室まで来てください》

帰り支度の最中に、むむーと震えたケータイに表示されたのは、単純明快で謎めいた一文。液晶画面をしばらく見つめながら、ぼくはメッセージが示す意味を考えていた。

図書室へ来いってことは……図書室の恋……じゃないよなあ。

いつもなら、こんなくだらないことは考えもしないし、ましてや行動に移したりはしなかつたと思う。差出人知らずのメールが届いただけでむやみやたらと好奇心をかきたてられるほどには、日常に飽き飽きしていたわけじゃない。

ただ、暇なだけだ。

ケータイをポケットにねじこむと、ぼくはショルダーバッグを提げて教室を出た。

中間テストは先週終わったばかり、六月にしては珍しく青空がスカッと広がるグラウンドでは、早くも野球部員たちが夏の大会を目指して練習をはじめていた。廊下の向こうからは金管楽器の音合わせが聞こえてくる。部活に励まない生徒にはテスト明けの開放的な気分が異常な量のフェロモン分泌を促進し、遊びの行動を誘引することが研究から明らかになっている。

要するに、こないだ天気の日にかび臭い本だらけの図書室に人を呼びつけるのは、いたずら以外のなにものでもないってことだ。

案の定、図書室にはほとんど人がいなかった。

四列に並んだ机の片隅で、三つ編みを振り乱しながら参考書や問題集の山に向かい、「ただいまモーレッツに勉強中なのよ!」というオーラをびんびんに放出している銀縁メガネの上級生がひとりいる

だけだった。一瞬だけ目を合わせた彼女は、しかしすぐに微分・積分の世界へと戻っていく。実行犯が彼女でないことだけは確信した。だいたい、こんな日にまで勉強しているような変人がわざわざぼくにメールを送りつけてくる理由がない。

ぼくは図書室をひとまわりしてみることにした。初夏の書架は形容しがたい高温多湿で、暗幕カーテンが窓にかかっているせいでやたらと薄暗い。よほど道慣れた者でないかぎり、ここをぶつからずに歩くのは無理じゃないだろうか。

さっきのメールが誰かのいたずらなのはもう百パーセント明白だった。恐らくいたずらを仕掛けた側にはシナリオが存在して、憤然と図書室を出てきたぼくを捕獲してカラオケにでも引っ張り出す算段がととのっているんだろう。クラスの連中がひとりも声をかけずに帰ってしまったつても、思えば不自然な話じゃないか。

誰もいない教室に、誰もいない図書室。符合はみごとに一致する

「……紡、くん」

「うわっ!」

いきなり呼びかけられて、図書室にあるまじき大声を出してしまった。つた。

だって、その日本文学の本棚には、まるで人の気配がしなかったのだから。

「よかった。紡くんがここまで来てくれて」

「もしかして、あのメールは、きみが……!」

もう少して、本日二度目の大声をあげてしまうところだった。

ぼくの目の前に、女の子が立っていた。小首をかしげる仕草でぼくに微笑みかけている。

肩にかかった黒髪を細い指先でひらりと払い、大きな黒い瞳でぼ

くを見つめて、
「好きよ、紡くん。大好きよ。だから、わたしと付き合っしてほしいの」

「……ちよつと、待ってくれないか」

ぼくはまだ、心の準備がまったくできていなかった。
学校一とまではいなくても、彼女は紛れもなく美人の部類に属するだろう。正直言って、ぼくの好み……どころじゃない、ど真ん中のストリート。しかも剛速球だ。

限りなく黒に近い濃紺のセーラー服が、清楚な少女によく似合う。衣替えはとつくに済んでいるのに、どういつわけか冬服。

それよりなにより、この高校の制服はセーラー服じゃない。

「紡くん……わたしのこと、知らないの？」

そんなことを言いながら、彼女が一步、ぼくに近づいてきた。
よくよく見ると……身体が……透けている……。

「な、な、なな、なな……」

「そう、わたしは『学校の七不思議』よ。図書室やプールの裏みたいなジメーつとしたところに出没するの」

「ほ、ほ、ほ、」

「ほ……？ わかった、紡くんは本を読みたいのね」

にっこりと少女が笑う。彼女の名前も知らないけれど、正体だけはよくわかった。

「向こうが透けて見えると、後ろの棚でも本が探しやすいくて便利でしょ。そうねえ……紡くんにはこの『東海道四谷怪談』なんてどうかしら」

は、は、はやく逃げないと……。

「紡くん……わたしのことが嫌いななの？」

「……え？」

「どうして？ わたしが《学校の七不思議》だから？」

七不思議少女の可愛らしい顔が、にわか梅雨空のように曇りはじめた。やがて彼女の大きな目から、涙のしずくがぼろり、ぼろりとこぼれ落ちる。

さて、ぼくらの高校には七不思議伝説よりも確かな真実がひとつある。

それはつまり、女の子が泣いているのを見て、黙って放っておくような男はひとりもないってことだ。

「そんなことはないよ。実は、ぼくも以前からきみのことを」

「……ほんと？」

本当だよ。きみの涙にかけて誓ってもいいよ。

でも、以前つてのは今から五秒前のことだけだ。

それからしばらくして、この学校の《七不思議》のひとつが現代風のものに差し替えられた。

いわく、知らない者から届いたメールに書かれた待ち合わせ場所に行つてはならない、行つてしまった生徒は行方不明になってしまう。って言うんだけど、そんなに怖い話だろうか。

だってぼくは、メールのおかげで可愛い彼女と付き合うようになったんだ。学校生活もなかなか充実しているし、結構楽しいよ。本当だよ。

嘘だと思つたら、来てみればいいよ。招待してあげるからさ。

メール、送ってあげようか。

《了》

(後書き)

電撃文庫フォーマットで印刷した時に、隠しメッセージが現れるように細工してあります。

メッセージの内容が知りたい方はこちら。

<http://fujiiwarahaijo.com/novels/SS-SandT.web.pdf>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9744t/>

短編企画「しずくとつむぐ」応募作品

2011年6月11日00時12分発行